

【巻 頭 言】

節目節目の御活躍！

——経営学部開設 20 周年・中垣昇先生退職記念号に寄せて——

中京大学学長 北 川 薫

1954 年、商学の短期大学として発足した中京大学ですが、短期大学が商学部の 4 年制大学に発展した後は学部数を増やし 1966 年までには商学、体育学、文学、法学の 4 学部の体制となりました。しかし、本学が発展的飛躍をした時期は 1990 年前後ではないかと思えます。わが国初の社会学部が 1986 年に、情報科学部が 1990 年に純増されましたが、1962 年に商学部の経営学科として発足した経営学科は 30 年後の 1991 年に経営学部として生まれ出ました。経営学部は発展する本学のマグマが噴出した第 1 号といえます。なお、商学部は経済学部、総合政策学部へと大きな飛躍をしました。また、同様の飛躍は文学部から心理学部、国際英語学部が独立していったことにも見られます。その後、経営学部は 1995 年に大学院修士課程を、1997 年には博士課程を昼夜開講制にて発足させ、さらには 2003 年には大学院ビジネス・イノベーション研究科修士課程を発足させるに至りました。

中垣先生は 1979 年 4 月に本学の商学部助教授としてご就任されましたが、経営学部発足の直前には商学部長を、1998 年には発足間もない経営学研究科の科長を、さらに発足したばかりのビジネス・イノベーション研究科の初代研究科長をお勤めになりました。まさに、中京大学の重要な柱である経営学部の発展の歴史において、節目節目には中垣先生がご活躍されたことはこのような歴史を振り返ってみても明らかです。恐らくは、心身ともに疲弊なさははずでしょうが、そのような素振りを全くお見せにならず、いつも端正なたたずまいであったことを思い出します。「さすが慶応ボーイ！」と感心をし、遠くから拝見しておりました。

中垣先生と私とは、ほぼ同じ頃に本学に奉職いたしております。赴任しました頃は、今振り返ってみれば、中京大学がどのようなものとなるかの見通しがついてはいなかった時期と思えます。いろいろな制度が整わず、いわば大福帳の時代であったのです。事務局が支配しているような国立大学から赴任した私にとっては、驚くばかりの状況でした。学部は違っても中垣先生も同じようなことを感じられていたものと思います。しかし、今、いわゆる公立大学のあり方を垣間みてみますと、その「ゆるさ」が中京大学のダイナミックさを作り出した基となったのではないかと思えてきます。そのことは、全国の大学の交流会にてしばしば感じています。同じような規模の大学であっても、場合によっては本学よりも小さな規模であっても、ほとんどの大学では学部相互の交流はないそうです。多くの学長が学部間交流の難しさの悩みをお持ちでした。

梅村総長・理事長の特徴ある個性が中京大学をここまで発展させたことは間違いありませんが、その真意を受け止め経営学部をここまで発展させてこられたのが中垣先生のダンディイズムと思えます。このダンディイズムは 1994 年の学位取得に現れています。この頃は新学部の設立に、また国際センター所長の業務にと実にお忙しい時でしたから、強い志をお持ちになってなければ学位を取ることはできないはずで、心から感服いたします。中垣先生には、これからも適切なアドバイスがいただけるものとご期待申し上げます。